

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎 REIMEI 明 報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0026号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成18年6月28日

「苦しみに時効はない」ドミニカ移民に愛の手を

「国に責任をとってもらいたい」、ドミニカ移民の切実な願いは届かなかった。昭和30年代に日本政府の政策のもと、カリブ海の島国・ドミニカ共和国に移住した人たちとその遺族の方々170人が「日本政府は優良な農地を無償譲渡する約束を守らず、劣悪な環境下で過酷な生活を強いられた」として国に約32億円の損害賠償を求める訴訟を起こしていましたが、今月7日東京地裁でその判決がありました。地裁の金井裁判長は「ドミニカ移住は日本政府の政策であり、政府は情報を収集して農業に適した移住先を確保するよう配慮する義務があったが、それを尽くさなかった」と国の不法行為を認めました。しかし「移住者の賠償請求権は、ドミニカに入植した時点から発生しており、既に20年以上経過しているため賠償請求権は消滅している」と原告の訴えを退けました。度重なる政府の「裏切り」に耐えてきた原告は「移民の苦しみに時効はない」と憤りを露わにしています。



石ころだらけの大地

「カリブの楽園で農業を」そんな国の募集に応じた249家族1319人の第一陣が、希望を胸にドミニカ共和国に渡ったのは1956年7月29日のことでした。振り分けられた7ヶ所の入植地で移住者たちが目にしたのは、塩の噴き出る砂漠のような土地や、掘っても掘っても石ころだらけの土地、それは「カリブの楽園」とはほど遠い不毛の大地でした。およそ農業のできる土地ではなく、やがて日本から工面してきた支度金も底をつき、移住者に残ったものは借金と絶望だけでした。移住民は「生活に苦勞しているから何とかして下さいと言っているのではありません。

約束した事を実行して欲しいと言っているのです」と何度も何度も大使館にかけ合いましたが、進展はありませんでした。時は流れ移住者は、6年前に国を相手に集団訴訟に踏み切りました。国側は「移住の条件を提示したのはドミニカ政府であり、責任はドミニカ政府にある」と責任転嫁をして日本政府に否はないと反論しました。しかし法廷に提出された一通の報告書によって明らかにされた事実は、日本政府の移住政策の杜撰さを明らかにしました。駐ドミニカ大使から外務省に送られた報告書には「移住先の土地に塩分があることや、石ころだらけの荒れた土地であることを強調すると移住者に不安を抱かせてしまう恐れがある。移住者に対して要領よく説明するよう特にお願いする」といった内容が書かれていました。実は日本政府は移住先が「カリブの楽園」どころか「荒れ果てた不毛の大地」であったことを知っていたのです。

来る日も来る日も荒地と闘い、日々の食べ物を得るために必死に働き、毎日をただ生きのびるために費やさざるを得なかった移住者には現地の大使館に要請するのがぎりぎりの選択であり、日本政府を訴える時間や経済的精神的余裕などなかったことでしょう。しかし判決は「既に賠償請求権は消滅している」と移住者の請求を無常にも却下しています。確かに法解釈としてはそうなるのかもしれませんが、入植地を離れることも叶わず、ましてや日本に帰ることなど到底できるはずのなかった移住者に対してあまりにも無慈悲な判決だったのではないかと思います。判決を受けて首相は「政治として対応しないといけない。7月29日が移民50周年なので気持ち良く迎えられるようにしないといけない」と原告である移住者の胸中を慮るような発言をしています。在任中の5年間、公約を破っても「大した問題ではない」と嘯いてきた首相の言葉を鵠呑みにすることはできません。その言葉がうわべだけでない事を心より願っています。



粗末な造りの移住者の家屋

日本の主要都市に向けて核ミサイルを配備し、日本から詐取したODAで開発途上国を手懐け、有人宇宙ロケットを飛ばし、オリンピックや万博を開催しようとする“お金に困らない”支那には740億円のODA援助を行うという愚行を重ねながら、かたや国家政策の犠牲となった人々には救いの手さえ差し伸べないとなったのでは、同胞の一人として痛惜の念に耐えられません。16日になって政府は、次期国会で超党派の議員立法により、実際に移住した「1世」を中心に補償金を支払うことを示しました。高齢化が進む移民者救済のための何らかの政策を本気で考えてやって欲しい、早急に考えてやって欲しい、日本国民がこれ以上、日本の政治に失望する事のないように。

編集人・戸出蒼流

ワールドカップに見る日本選手の「愛国情」

ドイツで開催されているサッカーの世界カップで、残念ながら日本代表は予選敗退という結果になった。敗因や日本代表チームの欠点はマスコミを始め多くの俄かサッカーファンが指摘しているが、今の日本代表に決定的に足りないものが「愛国情」であり「日本代表としての誇り」であることをどれだけ多くの国民が感じていることだろう。例えば試合前の国歌斉唱の際に「君が代」を歌わない選手が少なくない事は以前から指摘されているが、今回もその例外ではなかったことに「愛国情」と「日本代表としての誇り」の欠如が象徴的に現れている。多くの選手がろくに口を開けずに歌ったり、酷いものになると歌いすらない選手が数人いたが、その中でただ一人堂々と斉唱していたのがブラジルから帰化した三都主選手だったというのだから何をか況やである。

今春行われたWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)で日本が窮地に立たされた時、テレ朝のニュースステーションのおしゃべりキャスターは、原因のトップに「愛国情」を挙げた。左傾気味のこれまでの報道スタンスを考えると不思議な感じすらしたが、確かにそれまでのチームから日本代表としての誇りはあまり感じられなかった。しかし、この時はイチローという大リーガーも舌を巻く名選手がいた。日本代表としての誇りを持つイチローが主将として積極的に発言をし、行動することでピンチをばねにチームをまとめ、大逆転の優勝に導いたのは記憶に新しいところである。

サッカーの日本代表も状況はそれほど変わらないように思われるが、イチローの役割を果たすことができる選手がいなかった事が残念でならない。そんな状況の中でイチローになろうと懸命に努めたのは中田英寿選手である。しかし中田にはイチローほどのカリスマ性は無く、チームを泥沼から引き上げる事はできなかった。10数年前に三浦知良と共に活躍した元日本代表選手で、三都主同様にブラジルから帰化したラモス瑠偉は、日本チームの不甲斐無さを目の当たりにして、「外国の選手をしてみるよ。皆あんなに必死になって戦うのは、国の代表だからだ。日本の選手はそのところから外国の選手に負けている。自分のためだって？ そんな間違っているよ。なんでもっと大きいものを背負わないの？」と憤っていた。確かに技術的にはラモスが活躍した当時より、現在の方が数段高いであろう。しかし、日本代表としての誇り、日の丸を背負って戦う姿勢は、年を追う毎に希薄となってきていると感じるのは私だけではないだろう。

「愛国情」については、教育基本法改正論議の中でも賛否それぞれの意見が出され、マスコミにも大きく取り上げられた。しかし、WBCとワールドカップの両方を見比べることができた今年、改めて世界が国家単位でしのぎを削っていること、その中で「愛国情」と「民族の誇り」が重要な位置を占めることに、多くの日本人が気付いているのではないだろうか、そう願ってやまない。 編集人



落胆する日本選手たち

北のひめゆり・・・貴方はこの実話をご存知ですか？

北海道の北端、宗谷海峡をはさんで樺太の対岸に位置する稚内。その西側の小高い丘陵に稚内公園がある。稚内公園がある丘は、別名「望郷の丘」と呼ばれていて、丘の北端には、高さ8メートルの2つの白い塔とその間に高さ2,4メートルの乙女の像がある。これが名高い「氷雪の門」である。

この立派な大きな「氷雪の門」の傍らに小さな石碑がある。昭和20年8月20日、樺太真岡電報電話局で、9名のうら若き女性交換手が、迫り来る戦火の中で崇高な使命感のもとに職務を全うし、青酸カリで自決した事実を知らせる慰霊碑「九人の乙女の碑」である。碑文は以下の通りである。

【戦いは終わった それから五日 昭和二十年八月二十日 ソ連軍が樺太真岡に上陸を開始しようとした その時突如日本軍との間に戦いが始まった 戦火と化した真岡の町 その中で交換台に向かった九人の乙女らは 死をもって己の職場を守った 窓越しに見る砲弾の炸裂 刻々迫る身の危険 今はこれまでと死の交換台に向かい「皆さんこれが最後です さようなら さようなら」の言葉を残して青酸カリを飲み 夢多き若き尊き花の命を絶ち職に殉じた】

北のひめゆりたちの話は、沖縄のひめゆりのように広く普及してはいない。現在、沖縄のひめゆりたちは、反戦平和主義者の悪宣伝に利用されている。南北のひめゆりの情報量の格差は、この悪宣伝によるものではないかと思う。しかし樺太における戦闘は、日本の歴史を振り返る時、沖縄戦に勝るとも劣らない重要な意義があると思える。日ソ中立条約を一方的に破棄して日本に侵攻したソ連軍の暴挙、シベリヤ抑留での許し難いソ連の蛮行、北方領土問題とともにこれらのソ連の犯した大罪を風化させないためにも樺太の戦闘の史実を広く世に知らしめる必要性を痛感する。 編集人

黎明27号及び28号にて9人の乙女たちの辛く悲しい実話を連載する予定です。